マルタのやさしい刺繍 (Die Herbstzeitlosen)

2008(平成20)年7月29日鑑賞〈宣伝用 DVD 鑑賞〉



監督・共同執筆者=ベティナ・オベルリ/出演=シュテファニー・グラーザー/アンネマリー・デューリンガー/ハイジ=マリア・グレスナー/モニカ・グプサー/ハンスペーター・ミュラー=ドロサート/リリアン・ネーフ/モニカ・ニッゲラー/ペーター・ヴィスブロート/マンフレート・リヒティ(アルシネテラン配給/2006年スイス映画/86分)

……保守的な村の中、80歳の主人公マルタが今チャレンジしているのは、ランジェリー・ショップのオープン! その騒動の中で見えてくる人間模様とは……? また、マルタが老人たちに与えた夢と希望とは……? 福田内閣の「5つの安心プラン」の第1は高齢者政策だが、そんな小手先の細工ではこの国の変革はとてもムリ! しかし、「後期高齢者問題」の不平不満が鬱積し、爆発寸前のニッポン国も、こんな映画を観て学習すれば、視点がガラリと変わり前向きになるのでは……。

ばなぜ今、こんなスイス映画を?

『マルタのやさしい刺繍』は2007年度アカデミー賞外国語映画賞のスイス代表作品で、2008年10月中旬に東京で、そしてその後全国で順次上映予定の映画。それを配給・宣伝しているのは東京のアルシネテランという会社だが、このアルシネテランはつい最近中国映画『小さな赤い花』(06年)を紹介してもらってはじめて知り合った会社。映画評論家活動をしていると、こんな形で人脈が広がっていくから面白い。そんなわけで、(多分)はじめてスイス映画を観ることになったわけだが、主人公マルタを演じた88歳の主演女優シュテファニー・グラーザーの姿を見ていると、何ともタイムリーな時期に、タイムリーなテーマのスイス映画が登場してきたものと感心!

■ 「5 つの安心プラン」の第1の柱は?

内閣改造に注目が集まっている福田内閣は、7月29日「5つの安心プラン」を発表

したが、その第1の柱は高齢者政策。7月3日に観たベトナム映画『地球でいちばん幸せな場所』(07年)によると、ベトナムは人口8520万人だが、30歳未満が6割以上という若い国で、伸び盛りの国。それに対して、世界一の長寿大国で少子高齢化が進む日本は65歳以上が21.5%を占めるため、老人の国であり衰退の国……?

08年7月7日~9日の洞爺湖サミットで見せ場をつくることができなかった福田内閣は、後期高齢者問題で国民から総スカンを食らった痛手から立ち直れないまま、フラフラ飛行を続けている。しかし、そんな時代状況を切り開くには聞き飽きた100の言葉よりも、1つの斬新な映画の方がよほど効果的。したがって、政府や自治体は、老人問題対策として率先してこんな映画の上映会を企画してみては……。逆に、65歳以上の老人も、また75歳以上の後期高齢者も、「政府は老人を切り捨てるのか!」と文句を並べ立て、大合唱するよりこんな映画を観て、老人なりの夢や希望を持ち、息子や娘に頼らず自力で生きていく途を探ってみては……?

そうすれば、アルプスの国スイスのトループ村が変わり、村民たちの意識が変わったように、日本だって大きく変わっていくと私は思うのだが……。

80歳のマルタが置かれた境遇は?

日本人の平均寿命は女性85.7歳、男性78.7歳だが、スイスは世界4位で、女性が83.7歳、男性が78.5歳。映画の設定上80歳とされているマルタは、夫に先立たれて9カ月を経た今、まだ心の痛手から立ち直れず、早く夫のところに行きたいと願っている状態。

トループ村の牧師をしている息子ヴァルター(ハンスペーター・ミュラー=ドロサート)は、そんな母親が気がかり。そこでヴァルターは夫と共にやっていた雑貨屋を閉めて「好きなことをやれば……」と勧めたが、マルタの返事はあいまいなまま。そんな中、村の合唱団員を代表してフリッツ(マンフレート・リヒティ)が、虫に食われた団旗の修繕を昔刺繍をしていたというマルタに依頼してきた。そこで、マルタは、友人のフリーダ(アンネマリー・デューリンガー)、リージ(ハイジ=マリア・グレスナー)、ハンニ(モニカ・グプサー)らと一緒に、首都ベルンの生地屋に修繕用の生地を買いに出かけることに。その店でマルタが出会ったのが、美しいレースの生地。それを見ているうちに、マルタの気持の中に起きたある変化とは……?

■ 老人問題あれこれ! 賛成派 vs. 反対派

マルタ、フリーダ、リージ、ハンニの4人は、トループ村の仲良し老女4人組だが、それぞれ家庭問題を抱えていた。1番ポピュラーな問題を抱えているのはハンニ。ハンニの夫エルンスト(ペーター・ヴィスブロート)は車イス生活であるうえ毎日病院に通わなければならないが、農場経営をしている息子のフリッツは、ある保守政党の支部活動と農場経営が忙しいため、父親を施設に預け、母親もその側に住めばいいと冷たい提案。これに対して父親は怒り心頭だが、なかなか反論できない様子。また、若い時に運転免許証を取ることを禁じられてきたハンニは、今さら免許証を取るのは大変だし……。

次に、リージはトループ村では珍しい未婚の母で、夫はアメリカ人らしい。彼女は今、一人娘シャーリー(モニカ・ニッゲラー)と一緒に生活しているが、たしかに「アメリカ帰り」らしく考え方は何かと進歩的。したがって、いち早くマルタの立てたランジェリー・ショップ開店計画に賛成し、積極的に後押ししていくが……。

3番目のフリーダは、伝統的かつ保守的なおばあさん。したがって、ハンニと共にフリーダもマルタの計画には大反対。このように、それぞれ家庭問題を抱えたマルタの友人たちは、マルタの計画に賛成派 vs. 反対派に分かれながら、さまざまな騒動に巻き込まれていくことに……。

若き女性監督、ベティナ・オベルリの感性に拍手

日本で言えば、数年前に「時代の寵児」となったホリエモンのライブドア問題にも相当する(?)のが、スイスのトループ村に起きた革命的なマルタ騒動。それを、老人問題の枠を超えて、夢と希望いっぱいの人間ドラマとして描いたのは、1972年生まれの若い女性監督ベティナ・オベルリだ。

おばあさんと息子たちの争い、老女同士の友情と葛藤、そして村全体に巻き起こったいかがわしい(?)ランジェリー・ショップ追放運動の顛末を手際よく説明しながら、その中で展開される人間模様を温かくかつユーモラスに描く手腕は見事なもの。もちろん、老優たちのベテラン芸の達者さはあるが、それをうまく引出し、ハーモニーを与えたのは監督の功績だ。また、マルタの生地選び、裁断、ミシン使い、神経を使う刺繍作業など、ランジェリー製作をめぐる具体的な描写は男の監督ではとてもで



© 2006 Buena Vista International (Switzerland)

きない、女性監督特有のもの。そして上映時間も86分と編集も見事なもの。

スイス動員 No.1となったのも当然、とうなずける、こんな秀作をつくったベティ ナ・オベルリ監督に拍手!

運通販は? いやいやネット販売よ!

トループ村の人口が何人か知らないが、どうせ小さな村であることは明らか。マル タの昔からの夢は、パリのシャンゼリゼ涌りに自分のデザインした刺繍いっぱいのラ ンジェリー・ショップを出すことだったが、さすがにそれは遠い夢で、今実現したの は地元トループ村でのオープン。しかし「ランジェリー=いかがわしいもの」という イメージを強く持つ保守的なヴァルター牧師やフリッツがリーダーシップをもってい る村では、彼らの反発があれば地元客の足が遠のくのは当然。したがって、オープン 日の来客は1人だけというさびしい状況だったから、このままでは店はジリ貧で閉鎖 は必至。

ところが、老女4人の協議(おしゃべり?)から生まれてくる知恵と実行力は大し

たもの。通販は? いやいや今はインターネットの時代。ネット通販をやらなきゃ! というすばらしいアイデアが飛び出したからビックリ。それを実践するのは老人ホームで知り合ったルースリ氏とつき合うための口実を兼ねて、コンピューター教室に通い始めたフリーダ。

80歳のマルタとその周辺の老女だって、こんな知恵とエネルギーを発揮できるのだから、平均寿命85.7歳の日本の女性はもっともっと働けるはず。団塊世代の定年退職後の再雇用、などとみみっちい話をせず、上限制限なしで老人の再雇用政策をあちこちで立案しなければ……。

当男にはかなり厳しい視線が……

この映画は、若手女性監督が描く「スイスの後期高齢者」とも言うべきおばあさん たちの奮闘記。したがってその反面として、村のリーダーとなっている男たちの表面 上の立派さとは裏腹の、いやらしさと弱点が風刺的に登場する。

その第1は、いつも教会で模範的な演説をしているヴァルター牧師。自分が主宰している聖書会のためにマルタの店を使おうと考えた彼だったが、マルタがそこでランジェリー・ショップをやろうとしていることを知った時の反応は、あまりにも保守的かつ頑迷……? ベティナ・オベルリ監督は、そんな聖職にあるヴァルター牧師が陥っているある「落とし穴」もしっかり観客に見せてくれるから、それにも注目!

第2は、これもよくあるタイプのリーダーであるフリッツ。「老人にやさしい政策」を訴えている彼の政党リーダーとしての演説を聞いていると、言っていることとやっていることが正反対の、あの政治家、あの官僚の顔がダブって見えるから不思議。聴衆は一見黙って聞いているようだが、ホントはフリッツの言葉に疑問を持ち、考えているはず。トループ村民のそれはきっと、アメリカ国民がバラク・オバマやヒラリー・クリントンのスピーチがホンモノかどうかを見極めようと聞いていたのと同じはず。したがって、自分の政治活動や農場経営のために自分の父親を施設に入れてしまおうと考えているフリッツが語る「老人にやさしい政策」なんて、信用できないのは当たり前……?

ベティナ・オベルリ監督の現場の男たちに対する視線と評価はこのようにかなり厳 しいが、現場を預かる男たちとしては、そんな批判に耐えるだけの透明性ある政策を 示し、それを実行しなくちゃ。 2008(平成20)年7月30日記

182 若き女性監督の手堅い演出